

南サハリンの海岸草原

札幌市 辻井達一*・富士田裕子**

1992年の7月、2週間にわたって南サハリンの海岸草原の調査を行った。この調査は日本生命財団の補助を受けて行った研究の一部をなすものであった。

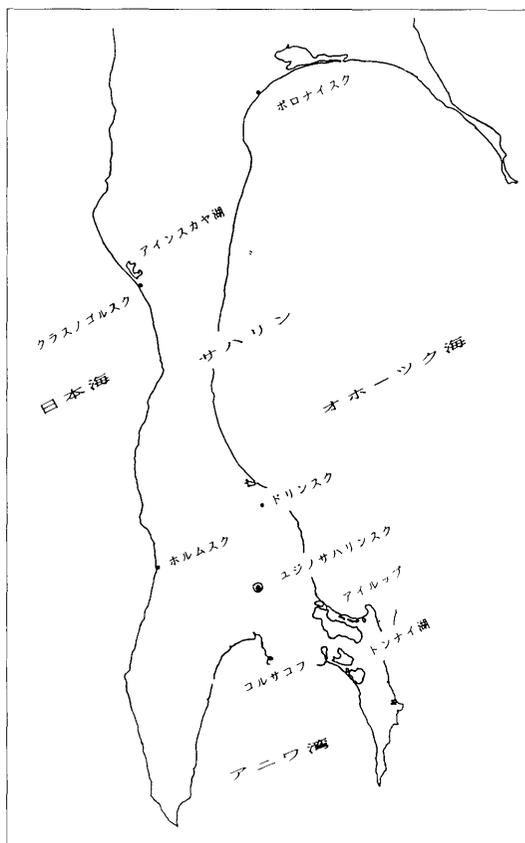
南サハリンはすなわち旧日本領樺太である。その北を限る北緯50度線を斜めに横切る植物分布の境界線にシュミット線というのがある。この線は基本的にはここから南のサハリンと北海道との植物における共通性を意味するもので、植物相が似ていることを示す。

私たちはこれまでに北海道の海岸草原の調査を心掛けてきた。海岸草原というのはほとんど北海道に特有といってもよい特殊なタイプの草原群落で、その幾つかは原生花園という名で観光地化されている。

原生花園という名はネーミングとしては拔群だが、実はその名が示すような「原始的」なものではない。しかし、自然の群落をベースとして発生していることは事実である。

ところが、北海道の海岸草原の大部分は、粗放な放牧が行われてきており、その後、放牧が中止されてからも侵入した牧草が却って増大したりしてその自然性は著しく損なわれてきた。さらに観光地化するにつれて今度は観光客の入り込みによる影響が加わった。これが北海道の海岸草原の現状である。

その植生は特殊で注目すべき存在である



し、将来とも、観光資源としての活用を望むならば、自然性の回復を計る修復措置を行う必要があると考えられる。そのためにはまず、そのプロトタイプ（原型）がどのようなものかが確かめられなければならないが、北海道には既に原型とみられる典型的な例を見ることができない。

そこで、北海道のそれと基本的には同じタイプと組成を持つ南サハリンの海岸草原にその例を求めたのであった。

1. 東海岸に沿って

オホーツク海に面するサハリン南部の東海岸にはトンナイ湖をはじめとして幾つかのラグーンが、あたかも網走の湖沼群、網走湖、サロマ湖、濤払湖などのように並ぶ。

そして、海岸草原もまた、網走海岸にみられるようによく発達している。

その一つ、アイルuppの海岸では幅およそ500 mほどの海岸草原が、砂丘列とそれに続く低い海岸段丘に連続して展開していた。

海浜の砂原にはわずかなオカヒジキ、ハマニガナ、ハマボウフウ、シロヨモギ、ハマムギ、コウボウムギ、ウンラン、ハマベンケイソウなどが散生するだけだが、砂丘列に入るとエゾオグルマ、カセンソウ、キタノコギリソウ、コガネギク、ノコギリソウ、ハチジョウナ、ヤナギタンポポ、ツリガネニンジン、エゾカワラマツバ、ナミキソウ、ムシャリンドウ、ハマヒルガオ、ハナイカリ、クサレダマ、ヤナギトラノオ、エゾノシシウド、エゾヨロイグサ、オオカサモチ、カラフトニンジン、ハマボウフウ、ホタルサイコ、マルバトウキ、ヤナギラン、オオバタチツボスミレ、エゾフウロ、クサフジ、センダイハギ、ナンテンハギ、ハマエンドウ、ヒロハクサフジ、ナワシロイチゴ、ハマナス、ムラサキベンケイソウ、ハマハタザオ、アキカラマツ、エゾトリカブト、サラシナショウマ、エゾカワラナデシコ、オオヤマフスマ、ハクサンチドリ、ネジバナ、ノハナショウブ、ヒオウギアヤメ、エゾキスゲ、エゾスカシユリ、エゾゼンテイカ、エゾネギ、オオアマドコロ、クルマ

ユリ、スズラン、ヒメイズイ、マイヅルソウ、ハマニンニクなど一連の草原要素が見事な群落を形成する。

海岸草原の成立要件としては地形的には低い砂丘列か、段丘面かが必要だが、このアイルupp海岸の場合はやや平坦な幅の広い砂丘上に発達するケースであった。

砂丘列の間の低湿地にかけてはサワギキョウ、エゾキヌタソウ、オドリコソウ、クサレダマ、エゾミソハギ、エゾツルキンバイ、アキカラマツ、ハイキンポウゲ、ノハナショウブ、ミソガワソウ、カノコソウ、シオガマガク、ヨツバシオガマ、ナガボノシロワレモコウ、フタマタイチゲなどがみられた。

この組成は北海道のそれとほとんど同じであるといつてよい。

これらの草種からなる草原の背後には、まずモンゴリナラの低い樹林が並び、その山側にかけてエゾマツ、トドマツの暗い林が、そしてさらにその奥にグイマツの林が出てくるのである。

まさに見事なスケールの海岸草原なのだが、実はここも本当の意味での「原生花園」ではなかった。そこここにも既に明らかな家畜の放牧の影響がみられるのである。

もっとも、その影響はまだ過度ではない。牛の群れが内陸側の道路沿いに移動するらしくて、その通路沿いとか、砂丘の海側つまり砂原については実際に放牧されているのを見たが、草原の全てにわたっていわゆる過放牧の状態になっているのではなかった。



その点では、まさに「原生花園」的な状態が維持されているといえるだろう。つまり、海岸草原の自然の姿が残されているケースと考えてよい。

したがって、ここにはまだ牧草類の占める場所はそう大きなものではない。まだ牧草の根がマット状に地表を覆って、自然の植生の生育を圧迫するという状態は見られなかったのは幸いである。

2. 西海岸に沿って

私たちはさらに海岸草原を求めて美しい風景のイルupp海岸から一旦、オホーツク海沿岸を北上した。そして南サハリンの北部のポロナイスクにまで達したのだが、これから先の東に突き出した岬へは道路がなく、やむを得ず、ポロナイスク周辺まで引き返すことにした。

そして今度は南サハリンの中央部のもっとも狭いところで低いブガチョーバ峠を抜

けて西海岸に出て、クラスノゴルスクの北にあるアインスカヤ湖とその周辺に達した。

クラスノゴルスクは日本領時代には珍内と呼ばれたところで炭鉱があり、北海道帝国大学の演習林があったところである。古い地図を持って行ったので、珍内の市街地に記入されているその事務所の位置と覚しき場所であれば探してみたが、結局、それらしい建物は確かめられなかった。

アインスカヤ湖は、アイヌ人の村のあったことからの名だそうだ。日本領時代の名は来知志湖という。

その湖の外側つまり海岸には、湖との間に数列のきわめてよく発達した砂丘がある。そのもっとも高いところは20mほどもあり、海岸から湖までは500mは十分にありそうだから、これも立派なスケールの海岸草原なのである。

海岸は、ほとんど何も生えていない砂原



サハリン南部アイルップのグイマツ林

が、ここではかなり急に切り立った感じの砂丘に接している。あるいは冬の海がかなり激しい波浪を打ちつけるのであろうか。

この海岸では、先に述べたアイルップ海岸よりも砂浜、砂丘の要素が強い。すなわち砂の露出している割合が高く、これはいい換えれば植生の被覆する割合が低いことになり、そこにはより草丈の低い種類が、あるいは同じ種類でも草丈が低く現れるということになっている。

この点は、北海道でも日本海岸でみられるケースと似ており、いわば日本海型の海岸草原ということになろう。

種類としてはカセンソウ、キタノコギリソウ、シロヨモギ、ノコギリソウ、ハマニガナ、ヤマハハコ、ツリガネニンジン、エゾカワラマツバ、エゾオオバコ、ウンラン、ナミキソウ、ムシャリンドウ、ハマベンケイソウ、ハマヒルガオ、ハナイカリ、ハマボウフウ、マルバトウキ、クサフジ、ハマ

エンドウ、ナワシロイチゴ、ハマナス、ハマハタザオ、ハマハコベ、オカヒジキ、ハクサンチドリ、エゾゼンテイカ、エゾネギ、ヒメイズイ、スズラン、マイヅルソウ、コウボウムギ、コウボウシバ、ハمامギ、コメガヤ、ハマニンニク、ハイネズ、リシリビャクシなどが多い。

砂丘列の内側には低いグイマツの疎林がほとんど直接に現れた。ここにはグイマツの下生としてガンコウラン、コケモモ、マイヅルソウ、ハイネズ、ゴゼンタチバナ、クロマメノキなどが見られた。グイマツの高さはせいぜい4 m内外で、古木の趣きを備えているが、これは比較的近年の植林によるという。

この砂丘の草原にも、かなり粗放ではあるが放牧が行われている。この草原もやはり完全な自然のものとはいえない。

3. グイマツ林

グイマツは北方型のカラマツで南千島やサハリン、そして大陸に分布するが北海道には分布がない。

このグイマツは、しばしば湿地や砂丘に群落を作るが、南サハリンでは先に述べたようにトンナイ湖周辺から北に向かって主としてオホーツク沿岸の海岸段丘上の湿原に成林する。アイルupp湖畔などにはその典型的なものがあり、林床は見事なイソツツジ、ヤマドリゼンマイ、ヒメシダ、ホロムイツツジ、ホロムイイチゴ、コケモモ、ヤチヤナギなどの群落で占められる。

東海岸の砂丘後背地にみられるものは先のアインスカヤ海岸の項で述べたように植林で、林床は少々タイプが違い、ガンコウラン、コケモモ、ハイネズ、リシリビヤクシンなどであった。

4. サハリン海岸草原の今後

サハリン海岸草原については、データを今、整理中で、その考察は今後のまとめに掛かっている。今のところいえることは、先にも述べたようにサハリンの海岸草原といえども既に自然とはいえないこと、多かれ少なかれ家畜の放牧の影響を受けている存在であること、しかし、海岸草原の本来の要素なり形なりは残していると考えられる。そこで、なるべくは少なくとも現在の状態が維持されることが望ましいのだが、サハリンの現在の社会情勢では、より生産性の高い牧野への転換が進められそうである。現にアイルupp海岸では牧草地化が進行中であった。

私たちの考えでは、海岸草原のツーリズムへの活用を計画したほうが、将来的にはむしろ地域の活性化にも役立つし、この数少ない海岸草原の原型ともいべき群落を残すことにも役立つと思う。これに、グイマツの美しい森林を加えれば、自然系リゾートとしても優れたものになるだろう。

そのためにも現存する海岸草原の保全を考えなければならない。ここでも放牧圧をどのレベルに抑えるか、家畜の放牧の影響、さらに人の立入りさえ制限するスペースをどう決めるか、あるいは私たちが今、北海道で実験しているように、草原群落の維持・再生のための野焼きなどを考慮する必要があるかなどをこれから検討しなければなるまい。

この調査旅行に際しては本会の高野英二氏から拝借した五万分の一地形図が大いに役に立った。ここに記してお礼申し上げる。
(*北大農学部農林生態学研究室、**北大農学部附属植物園)

